

探究する心を育むⅡ ～生き物博物館の実践から～

○宮里 暁美 石川 綾子 伊集院 理子 上坂元 絵里 川辺 尚子 佐藤 寛子
高橋 陽子 灰谷 知子 渡辺 満美 (お茶の水女子大学附属幼稚園)

I. はじめに

子どもたちは、身近な環境に自分からかかわり、見たり聞いたり触れたりすることを通して、そのものを味わっていく。それは知識として与えられるものではなく、自分自身で獲得していくものである。何かに興味をもつと、そのことに没頭し集中する。そして、かかわりを重ねる中で、そのもののことをより広くより深く理解していくようになる。本園では、自分から環境にかかわって遊ぶ営みを大切にしたい保育を行っている。このような保育のあり方が、探究する心を育むと考えている。

探究する心を育むⅡでは、身の回りにいる小さな生き物への興味や関心をひろげたり、深めたりしていった実践「生き物博物館」について検討し、探究する心を育むことにつながったと思われる経験や環境、援助のあり方について考察する。

II. 研究の内容

1 きっかけと「生き物博物館」に込めた思い

大学職員のMさんは日本昆虫協会会員であり、多くの昆虫の標本を所有しているという情報を得たこと。本園の園庭には、小さな生き物と出会えるよう草を生い茂らせたり、花を植えたりしている。このような環境の中で、子どもたちは、夢中になって虫を探し飼育していたこと。これらのことから、標本を見せてもらうことを通して、小さな生き物への興味や関心がさらにひろがったり深まったりすることを願って実施した。

2 生き物博物館の概要

時期：7月第2週(1週間)

場所：幼稚園内アトリエ(多目的保育室)

展示：昆虫標本・生きた虫のコーナー・水中生物のコーナー・園内自然マップ・生き物にかかわる子どもたちの写真等

協力者：日本昆虫協会の方々

見学者：園児、保護者、弟妹、附属小学校、ナーサリーの子どもたち等

3 活動経過

第1回虫博物館(2007年)

昆虫標本を中心とした展示を行う。虫博物館後Mさんを「虫博士」と呼び親しむようになる。

第2回虫博物館(2008年)

生きた虫のコーナーが人気。大学内に虫を呼ぶ里山計画との出会い。9月、年長児が「自分たちの虫博物館」を創り出す。飼育している虫を展示して、年中児たちに説明する。

第3回生き物博物館(2009年)

カエル好きの子どもたちの要望でカエルが展示され大人気。名称を「生き物博物館」に変更。生餌を食べる様子の録画コーナー設置。保育室で「チョウの家」作りが始まる。

第4回生き物博物館(2010年)

教員が近隣の水場で水中生物を捕獲。大きな水槽に入れて見せるコーナーが人気。

第5回生き物博物館(2011年)

保護者向けに虫の飼い方などの話や、夏休み中に実施するセミの羽化の観察会のお知らせなど情報発信を活発に行う。

第6回～第7回生き物博物館(2012～2013年)

より細かく見たいという声があがり、実体顕微鏡コーナー設置。セミやカブトムシの羽、トンボの目等を見る。保護者も夢中になる。

4 探究する心を育むことにつながったこと

(1) 標本との出会い：興味や関心の芽生え

標本になじみの薄い子どもたちにとって、本物の虫がじっとそこにいるということに驚きつつ、大きさや形の微妙な違いに見入る姿があった。上下左右から見る事が出来、図鑑で見るのとは違う。標本を見る、戸外で虫を追うという両方の経験が大切だと感じた。

(2) 専門家との出会い：興味や関心の広がり

「大学構内で見つけた虫」コーナーの前では、保護者の歓声があがっていた。Mさんが来るのを待ちかねて、飼育ケースを持った子どもたちが「見て!」「これ何っていう虫?」と集まってくる。標本も知識も、そこに「人」が存在するから面白くなり、専門家の「まなざし」から学んでいる。対話の中で興味や関心が広がった。

(3) 日々の生活とのつながり：興味や関心の持続

子どもたちが身近な環境に触れて感じたり発見したりしていることと生き物博物館の取り組みが繋がっていくようにしたいと考え、工夫を重ねた。見せてほしい虫を子どもたちと考え合いリクエストしたり、博物館の準備を子どもたちと行ったりした。園内で虫を見つけた時に印をつけていくマップ作りも行った。子どもが主体になる取り組みが大切だと実感した。

(4) 保護者も夢中になる経験：興味や関心の共有

ずらりと並ぶ標本を見ている時の親子は、同じように驚いたり見入ったりしていた。専門家からのアドバイスは的確で、保護者の心をとらえる。セミの羽化の観察会に参加した保護者は子ども以上に感動していた。子どもの探究心は周囲の大人の影響を受ける。保護者もともに、夢中になる体験が大切だということが分かった。

III. おわりに

「生き物博物館」をきっかけとした様々な体験を通して、子どもたちや教師の中に残ったのは「生き物への向き合い方」「生き物との対話の仕方」だった。驚きの心を持ち、いろいろな角度から虫を眺め、美しさや不思議さを感じ取っていく生活、それは生き物とのかかわりだけにとどまらない気付きである。

子どもたちは、いろいろなものやことと出会いながら生活している。見えないものを見ようとし、感じ取ろうとし、感じ取ったことを伝え合って生活している。このような生活の中で、探究する心が育まれていくのだと考える。